

源氏物語における仏教的要素

——源氏物語はこの世をどう考えているか（覚書）——

丸 山 キ ヨ 子

源氏物語がこの世——仏教的な用語でいう現世——をどのように考え位置づけているかということ、物語の叙述に即して考えてみたい。それは、当時の宗教であった仏教、加えて、それから当然導き出されてくる筈である倫理観の問題に深く関ってくることであり、物語の深層の探究に欠くことの出来ないものがあると思うからである。もっとも、源氏物語がこの世をどう考えていたかというようなことは、一般に、精神史、思想史の方面からする考察で、すでに解決ずみのようにも思われる。しかし、その結論とするところは、源氏物語を含めた当時の文芸作品などから、任意に抽出した資料から得られた最大公約数的な考え方を、もう一度源氏物語に返してあてはめた、いわば循環論法的方法でなされたものであり、それも余りに大づかみなものにすぎないように思われる。それに飽きたりないので、もう一度取りあげてみたいと思ったまでである。

あらかじめ注意しておきたいことは、源氏物語には「現世」の用例は一つも見当たらないということである。すべて「この世」という表現が用いられており、源氏物語大成によればこの方は一〇二の用例が数えられる。そうして「この世」は

さて、もあやしや、わが世と共に恐しと思ひし事の報なめり、この世にて、かく思ひかけぬ事にむかはりぬれば、後の世の罪もすこし軽みなむやと思す。

(柏木)

というように「後の世」に対するものであり、また、

まことに、彼はいと様異なりし人ぞかし。今はまたその世にもねびまさりて、光るとはこれを言ふべきにやと見ゆるにほひなむいとど加はりにたる。……中略、……何事にも前の世おしはかられて、めづらかなる人の有様なり。

(若菜上)

と、「前の世」にも対するものである。引用の前者は、薫の出生に、かつて藤壺宮との間に犯した罪を思い出して慄然としている源氏君の感慨、後者は女三宮の嬪選びに心労される朱雀院が、理想的男性として源氏君のことを語るその一部である。源氏物語における「この世」という表現は、ほとんど例外なく、上述のような意味合で用いられている。とするならば、これは、その用例が一つもないにも拘らず、仏教用語としての、三世、過・現・未、あるいは、前、現、後の「現世」にあたるものとして、三世に位置づけて考えていることを知ることが出来る。そこで、そのように考えられた「この世」を、どのような内容において考えているかの考察に移ろうと思う。

源氏物語の中で、この世に対する考え方が伺われるような場合は、それが主要人物であれ、それ程に扱われていない場合であれ、物語の主流をなす男女の愛情の関係における危機に際して、深い反省、思索のなされる場合に顕わとなってくる。それは、たとえば人の力をもってしては如何ともなしがたい死別とか、何らかの事情による愛情の破綻というような運命の拒否に直面した場合である。中でも、源氏君、薫、紫上、藤壺宮など、物語の中枢を占めるねんごろな扱いを受けた人物が、そのようなねんごろな扱いの故に披瀝するところの述懐は、それ以前の物語に見られなかったものであり、それがあるがゆえに卓絶した存在として、物語を深味あらしめているのである。私の考察の手懸りとしては最も都合のよい材料を提供してくれているので、まずそのようなところに見られる客観性の多い徴標を取りあげ、更に物語に散見するその他の材料に及ぼし、出来れば、叙述の背後にひそめられた関連的事項に押し及ぼしてゆきたいと思っている。

第一に源氏君の場合を見ようと思うのであるが、そのもつとも顯著なものは、紫上を先立てていいような悲しみに沈み、その思い出のみに生きる晩年の姿を描かれた、幻の巻における述懐である。

この世につけては、飽かず思ふべき事をさあるまじう、高き身には生れながら、また人より異に、口惜しき契にもありけるかなと、思ふこと絶えず。世のはかなく憂きを知らすべく、仏などの掟て給へる身なるべし。それを強ひて知らぬ顔になからふれば、かく今は夕近き末に、いみじき事のどぢめを見つるに、宿世の程も、自らの心の際も、残りなく見はてて心安きに、今なむ露のほだしなくなりたるを、これかれ、かくて、ありしよりけに目ならず人々の、今はとて行き別れむ程こそ、今一際の心乱れぬべけれ。いとはかなしかし、わるかりける心の程かな。

源氏君の生涯回顧のこの言葉は、物語の中枢人物の披瀝した人生観として、すでに多くの人々の注目する所となつたものであるが、私が、今、此処で注意したいと思うのは、契、宿世の二語である。「契」は、こういう名詞的の用法は、ほとんど、前世からの約束としてのこの世の運命という意味に用いられていると思われるが（「契る」と動詞に用いれば、この世における単なる約束の意にも用いるが、「契」と名詞に用いれば、前世からの約束として宿世の意となる〔源氏物語の研究 森岡常夫〕）源氏君のこの述懐が指示している具体的な内容を探れば、明らかにそれは薄藤壺宮その人との関りにおける、充されない運命を指しているようである。絶えずという表現からは、かの藤壺宮に對して、生前はもとより、その死後においても、事あるごとにゆれ動いて、しかも充されない思いをかみしめ続けなければならなかったことを読みとることが出来るのであるが、それを中心的存在として、他の女性、朝顔の斎院へのとげられぬ恋、空蟬・夕顔などのはかなく終った恋の思い出もまつわるではあるう。しかし、それらは余り問題にはならないのであって、落着く所は藤壺宮との関係にあると思われる。契が、このようにしておもに男女間の縁としての前世からの約束、運命として用いられているのに對し、宿世はもう少し広い意味に用いられている。最愛の紫

上を見送った後、その悲しみの漸く落着くにつれて、人生のたそがれ時に受けたこの痛手を最後として振返った時、その生涯の辿るべき運命のすべてを見果てた者として、それを宿世と受け取り、それに対処して見苦しい動揺を示した自分の心を省ている。宿世はこのように、より広く人生万般の内容を含めて用いられているようである。ともあれ、ここに源氏君によって省られたその生涯の生の内容、それを契、宿世として受とめられていることを知ることが出来る。

つぎに、それではその契、宿世をどう受けとめているかであるが、まず、「口惜しき契」を「世のはかなく憂きを知らすべく、仏などの掟て給へる身」といつているように、充されない愛の関りを、それゆえに、仏の無常をもってする勤めとして、仏の永遠への尊きの善巧、方便として受取っているのである。振り返って源氏君の生涯を辿る時、「光源氏の道心」（岡崎義恵）にいみじくも指摘されたように、彼の生涯は道心の探究の歴史としても辿ることが出来るほどに、その生涯の要所々々において道心を萌し、出家を志しているのがあった。しかし、源氏君は出家をしなかった。ようやく、今日「掟て給へる身なるべし」と覚ったのであるが、その掟てに従わなかったゆえに、生涯の果てに、最大の誠めとして紫上との死別を体験したのであって、そこではじめて「残なく見はてて心安きに、今は露のほだしなくなりたるを」と、出家の身構えをしているのである。源氏君はここで始めて生涯を省み、女性関係の不如意において受けた打撃、運命の欠けを仏の導き、摂理として受け取り得た。そうして、それは、源氏君ゆえに始めて出来たことなのであって、人生觀照の深さ確かさにおいて最高の境地に達しているものと指摘されるのである。しかし、ここで私の特に注意したいことは、今日までの過程においては、時に道心を萌しながらも、「しひて知らず顔」に見過してきた源氏君が、今更に決定的な運命の拒否にあって、はじめて「見はて」た「心安さ」ゆえに、それを摂理と受け取り得、出家へと踏み切り得たということである。促がされても決行出来なかったのは、「見はて」たという「心安さ」が伴わなければ、決断出来なかったということである。

以上、源氏君にとっては、この世の生の内容は契、宿世として、前世からの因縁として受けとられ、これを見果てた者の行くべき道として、出家が志向されていることが理解されると思う。しかも、その出家への踏切りが、宿世を

「見はて」た「心安さ」において始めて可能であることを知りうるのである。そうして、その「心安さ」が、如何に全き姿で要求されるかは、次の様な叙述によって、一層明らかになると思われる。

いにしへより御身の有様思し続けるに、鏡に見ゆる影をはじめて、人には異りける身ながら、いはけなき程より、悲しく常なき世を思ひ知るべく、仏などのすすめ給ひける身を心強く過して、つひに來し方行く先も例あらじと覚ゆる悲しさを見つるかな、今はこの世にうしろめたきこと残らずなりぬ、ひたみちに行におもむきなむに、さはり所あるまじきを、いとかくをさめむ方なき心惑にては、願はむ道にも入り難くやとやましきを、この思すこし斜に、忘れさせ給へと、阿弥陀仏を念じ奉り給ふ。

(御法)

これは紫上を先立てた直後の述懐であり、幻の巻のそれとほぼ同一の内容を、それよりも意を尽した表現をなしているので、幻のその補いとしてみられると思うが、この方は紫上を失った直後のものとしての悲しみが色濃く現されており、その悲しみの克服の方に重点が置かれているのである。そうして、この悲しみに曇る心では、出家も全き姿では行われ難いとして、心静まるように阿弥陀仏に願おうといっているのである。このようなことは幻の巻の述懐にもいささか見られはする。「これかれ、かくて、ありしよりけに目ならず人々の、今はとて行き別れむ程こそ、今一際の心乱れぬべけれ。いとかなしかし、わろかりける心の程かな」と反省されていることである。女房達との別離に心曇らされることを危惧しているのである。しかし、これには挨拶の氣持も含まれているであろうから、文字通り受け取らなくてもよいであろう。

私は先に源氏君の生涯回顧において、宿世を摂理として受けとった源氏君の心の深きを指摘した。源氏物語には同じような心境を描かれて、しかも源氏君の決断にまで至らない姿が示されているのである。それは、大君を失い、中君を匂宮に渡し、今また思いがけなくも浮舟を亡くして、痛切な歎きの中にある薫の姿である。

ただ今は、さらに思ひしづめむかたなきままに、くやしきことの数知らず、かかることの筋につけて、いみじうもの思ふべき宿世なりけり。さま異に志したりし身の、思ひの外に、かく例の人にてながらふるを、仏などにもくしと見給うにや、人の心を起させむとて、仏のし給ふ方便は、慈悲をも隠して、かやうにこそはあなれ、と思

ひつづけて、行ひをのみし給ふ。

(蜻蛉)

これは、幻の巻における源氏君の述懐を、更に一步進めたものと見ることも出来る。この思いは、更に煎じつめられては

いと尊くおはせしあたりに、仏をしるべにて後の世をのみ契りしに、心ぎたなき末の違ひめに、思い知らするなめり、とぞ覚ゆる。

(蜻蛉)

という述懐に進展するであろうし、遡っては太君の死に際して

まことに世の中を思ひ棄て果つるしるべならば、おそろしげに憂きことの悲しさも醒めぬべき節をだに見つけさせ給へと仏を念じ給へど、

(総角)

と描かれる悲願にも通じてゆくであろう。しかし薫は、仏に「思ひ知らさ」れたと自覚してもなお出家に踏切ること出来なかった。そこには、三条の母宮(女三宮)また残された中君への配慮もあったであろう。そうして、それらをすべて含めて「見はて」た「心安さ」に遠かったからである。物語の本文に即してみるならば、摂理としての理解は、それだけでは出家に踏切らせるものではなかったようである。繰り返し薫を襲った不如意は、彼を出家の方へと追やるであろう。薫自身もそう受け取っている。源氏君との違いはその姿勢の違いではなくして時の違いではないであろうか。源氏君は生涯の最後に、見はてた時にそのように自覚したのであるが、薫はその出発が出發であっただけに(その出生を訝かしく思う心から、この世のみに即さず、仏道への傾斜をもって出發していた。〔匂宮〕)道程において絶えず自覚的に受けとりつつ、最後の時としての体験的自覚が得られずに、いるのではないであろうか。薫は仏の方便と覺ったが、まだこの世を見果てたとはいっていない。だからこそ、これは太君を失った時ではあったが、見果てるべきならそれをしてほしいと願っているのである。出家に踏み切らせる力は仏の方便としての理解よりも、見はてたという体験的裏打ちの方が決定的なのではないであろうか。薫のたゆたたいに見られる生の姿は、薫ほど自覚的ではなかったけれども、源氏君の、道心を萌し萌してゆく姿と実は同じではなかったかと思うのである。

このようにくどくどと述べるのは、源氏君も薫も、前世からの因縁によって開展するこの世は、出家によって離脱

すべく導かれていたのであるが、全き離脱を遂げる為には、體驗的に裏づけられた得心が必要であり、觀念的な理解よりも、體驗的な「見はて」た「心安さ」が先行しなければならなかったことを云いたかったからである。そしてその意味では、源氏君の生も、薫の生も等しかったと思われるのである。

ここで、私は、もう一つの証拠を出したいと思う。同じく主要人物である紫上の晩年の心境である。女三宮の六条院降嫁の痛手に、源氏君の愛情を信じて信じきれぬ思いに、独り苦悩する紫上が、ようやくこの世の離脱を決意して源氏君に訴えた最初の言葉は、

今はかうおほぞうのすまいならで、のどやかにおこなひをもとなむ思ふ。この世はかばかりと、見はてつる心地する齡よはひにもなりにけり。さりぬべき様さまに思しゆるしてよ。

(若菜上)

というのであった。「この世はかばかりと見はてつる心地する齡にもなりにけり」とはっきり理由を打出している。これが最も妥当な踏切台なのである。切なる願いを許さぬ源氏に迫ってゆく時、「まめやかには、いと行先少き心地するを、今年もかく知らず顔にて過すは、いとうしろめたくこそ」(若菜下)と、仏の摂理としての促しをも、女性ゆえに婉曲に訴えている。これは、すでに見てきた源氏君や薫の述懐と全く同質である。しかし、紫上には、女性として、より慎しやかな、真摯な表現がなされているのである。六条院の榮華の最後をかざる女樂の翌日、久しぶりに源氏君と、しみじみと交した会話の中に見られるものである。その会話の中には、次のような言葉もあった。源氏君が、紫上の安らかな境遇をほのめかして、高貴な女性といっても、帝にお仕えするにつけても、競う心の苦しさを経験しなければならぬのが女性の運命であるのに比べて、「親の窓の内ながら過し給へるやうなる、心やすきことはなし。そのかた、人にすぐれたりける宿世とは思し知るや」と問いかけた答である。

宣うやうにもはかなき身には過ぎにたる余所のおぼえはあらめど、心に堪へぬもの歎かしさのみうち添ふや、さは自らの祈なりける。

(若菜下)

内に堪えられた深い悲しみを、源氏君や薫と同じように、運命の拒否として受けとめながら、それを「祈りなりける」と云っているのである。この魂の深みにおいて用いられている「祈」という言葉は、如何に解すべきであろう

か。運命の欠如に処して、それゆえに祈心、慎しみの心を与えられ、支えられて、今日迄を大過なく過しえていっているのであらうか。運命の欠如のゆえに、垣間見させられる永遠を祈るつましき。仏が垣間見させ、それによって永遠への道を促される。そうした心の方向を表現したものと見ることは、余りに現代的な解釈であらうか。ともあれ十世紀の文学に記された「祈り」の語の表すものの深さに注目しておきたいと思う。このようにして、紫上もまた、運命の欠如の故に祈りをもつことを教えられているのであるが、それは徐々に押し進める契機であって、かの出家の願いを決定的に裏づけるものとして出された切札的な表現は、「この世を見はて」ということにある。

宿世の語は経文としては法華経などに用例を見うるのであって、経文を引く字書的な意味としては、「前世」の意味しかない。が、そこから、前世との関りにおいてこの世を考える、宿世の業、宿縁として、前世の因縁で現世のすべてが定められるとする運命的な受取り方が出て来るのである。そうしてこの受取り方こそ日本文芸において始めてみられる特色なのである。（「源氏物語の研究」森岡常夫）源氏物語以前では宇津保物語その他にも用例はあるが、その意味の深さ、用例の豊富さにおいて先行作者の比ではないというのが先学の示された結論である。私は今、宿世の語が反映する源氏物語の文芸的色合いを探るのではなしに、源氏物語が「この世」の内容として考える宿世を考察する段階にあるので専らその方向に進もうと思う。

「この世をかばかりと見はてる」という時のこの世とは、すでに見てきたように、宿世の開展として、前の世との関連において見られる姿であった。それは、

宿世などいふなることは知り難きわざなれば

（若菜上）

宿世などいふらむものは目に見えぬわざにて

（若菜下）

その昔の御宿世は目に見えぬものなれば

（竹河）

というように、目に見えぬ前の世からの約束として、この世における開展によって、始めて知り得るものなのである。それゆえ、この世は過去世の因・宿業の開展の場所として、過去からの関連において、見られぬ世界を、この見

える世界において受止めるべく存在するものと理解しうるのである。しかしどのようなにすぐれた宿世に生まれた人であっても、物語の世界における、源氏君、薫、紫上のような人々でも、そこに「口惜しき契」を「心に堪へぬものなげかしさ」を経験せずにはいられなかった。それは、仏の慈悲によって、方便としての拒否であり、出家を促すものであった。それは前の世とこの世との連りに見られる輪廻の苦しみと、そこからの断絶を指し示すものである。どのようなにすぐれた宿世でも、輪廻の世界における限り、苦しみ悩みがつきまとう。仏の教に従って、そこから断絶しない限り、永遠に苦しまなければならないのである。そして、その断絶は、専ら来世にかかっている。出家勤行することによって極樂往生し、水清き蓮の上で成仏を祈ることしかない。この世に人と生まれて、仏の教に耳を貸しうるのは、この永遠の苦悩から断絶しうる恵みに一歩足を踏み入れていることである。このように見てくると、究極的な意味においては、この世は来世の準備の時である。そうして、出家の時期は一刻も早いことが望ましいのである。

しかし、この世の生は官能の世界である。特別の使命感をもって、始めから仏に捧げて生涯を過す者と、一般人とは区別がある。そこで段階が設けられ、前世からの関連における宿世を見究め、もうこれ以上の可能性に対して未練を懐かないという所に達して、始めて、前世からの因縁を絶ち切って、来世の準備をすべきであるというのである。その意味で、出家は意識的な積極的な来世への準備である。それ故に一度出家をするならば、省て後世にかかずるうことは最も忌むべきことである。物語の主要人物が、なかなか出家を決行出来ず、もどかしい程なためたいを示すのは、源氏君において然り、薫において然り、彼等はするくらいならばこの世との全き断絶を、と、願う故に他ならなかったからである。重ね重ねの切なる紫上の願いを退ける源氏君の言葉は、左のように述べられている。

さるはわが御心にも、然思そめたる筋なれば、かくねんごろに思ひ給へるついでに催されて、同じ道にも入りなむと思せど、一度家を出で給ひなば、仮にもこの世を顧むとは思ひ掟てず。後の世には同じ蓮の座をも分けむと契り交し聞え給ひて、頼をかけ給ふ御中なれど、ここながらつとめ給はむ程は、同じ山なりとも峯を隔ててあひ見奉らぬ住処すまかにかけ離れなむ事をのみ思し設けたるに、かくいと頼もしげなきさまになやみあつい給へば、いと心苦しき御有様を今はと往き離れむきざみには棄て難く、なかなか山水やまみづの住処すまか濁りぬべく、思しとどこほる程

に、ただうちあさへたる道心起す人々には、こよなう後れ給ひぬべかめり。

(御法)

長々と引用したが、これでその趣旨はよくわかるようである。このようにして、源氏君は紫上の出家を許さぬままに、彼女が息を引取ってから、夕霧が、今はもうその甲斐もないであろうと呟くその時になって、あわてて戒を受けさせたのであった。

出家を許されない紫上は、それを「わが御身をも罪軽かるまじきにやと、うしろめたく思されけり」(御法)と受取っている。紫上の内面的な準備はすっかりなされていた。踏切る決断も、夫たる源氏君さえ許したならば、という所までできていた。それでもなお許されないゆえに、上述のごとき思いを懷かねばならなかったのである。いったい、源氏物語の中で、出家の本来の条件を、本質的に内面的に備ええた姿を示したのは、女性では紫上独りといつてよいと思われる。

源氏物語においては、出家はそのように厳しいものであるゆえに、一方では、若年の者の、機熟さない出家は、極力押し止められる姿が描かれている。それが端的に伺えるのは、柏木巻における女三宮の出家の希望をなだめる朱雀院の言葉である。女三宮自らの過ちのためとはいえ、出産の苦しみもまだ癒えない宮に対する源氏君の疎隔は、宮を鍛えて別人の観ある決断力を与えた。出家の決心をしたのである。見舞いに訪れられた朱雀院に、その願を訴える宮に、院は左のように述べておられる。

さる御本意あらば、いと尊き事なるを。さすがに限らぬ命の程にて、行末遠き人は却て事の乱れあり、世の人に誘らるるやうありぬべきことになむ なほ憚りぬべき。

(柏木)

これは外聞を憚った心弱さなどというものではないのであって、生先遠い若人の、今の苦しみを逃れる為の早まった出家は、将来未知数の宿世の可能性が、思いもかけない開頭をした場合、もう一度立ち戻りたい心の乱れを感じるかもしれない、そうした未練は出家をしないことよりも、もっと悪いことであるゆえに、思い止まらせるのが常識となっていたからである。

宇治川入水を決意した後の浮舟も、その心は以前の浮舟とは別人の観あるものに鍛えられていた。手習の君となっ

た浮舟が、思いがけなく山を降りてきた僧都に出家を願出た時の決意は固かったが、それを思い止まらせようとして僧都がなだめたのも、同様の趣旨であった。

まだいに行く先遠げなる御程に、いかでかひたみちにしかは思し立たむ。かへりて罪あることなり。思ひ立ちて心を起し給ふ程は強く思せど、年月経れば、女の御身といふもの、いとたいだいしきものになむ。(手習)

しかし、これらのことをわけた阻止にも拘らず、たつて願つて出家をとげた女三宮、浮舟は「この世にはかひなきやうになる」(柏木) ことであり、「この世になき人と同じやうにな」(夢浮橋) ることであった。

そうして、余りに慎重であつたゆえに、出家の時を逸しはしないかと訝かられるような源氏君も、あとに残す子孫の榮えゆく末までを見置いて、それゆえの安らかな離脱を願う明石君の励めに対しては、

さまで思ひのとどめむ心深さこそ、浅きにおとりぬべけれ。

(幻)

と、決然と云うことの出来る心境に至つたのであつた。幻の巻に姿を消して以来、後に続く巻々にふたたび姿を現さぬ源氏君は、それが後の挿入であろうかとの説もあるけれども、もしもそのまま、源氏君の世界を描いた同じ作者が書き続けた物語の内容の一節とするならば、宿木巻の次の叙述

故院の亡せ給ひて後、二三年ばかりの末に世をそむき給ひし嵯峨の院にも云々

にいわれているように、出家の後、嵯峨の院において、二、三年の精進の後にその生涯を終えたものと考えられるのである。

二

以上のように見てくると、源氏物語において考えられる「この世」とは、宿世として関つてくる前世と、その精進の結果によって、永遠の平安が得られるか否かという関りようによって存在する後世とにはさまれた、暫くの生の時

であった。前世は知られない時として、この世への関りようにおいて始めて知り得るのであり、特定の宿世によって若くして出家する人は格別、そうでない限りは、この前世から関つてあるこの世の開展を見ていて、これを未練なく否定出来る時まで見定めたいと、出来るだけ早くこれを離脱して後世の準備をすべきであると考えられていたようである。この世に、人と生まれたことはどれ程か前世の果報を得ているわけであるけれども、ふたたび転生の憂き目を見ないためには、来世において、永遠の平安が約束されている極樂浄土に往生しなければならぬ。このように考へるならば、最も重要な生は、極樂浄土にあるのであるが、官能の世界に住する人間にとって、見えぬ来世にかけ希望よりは、見えるこの世との訣別の方が、はるかにその心に重い負担を感じしめるのである。そうして、前世からの関係、宿世の因縁は受身の立場でその開展を待つことにおいて一種の弛緩を、来世への期待にける緊張は、しかしそれが官能の外なる世界として、無条件の緊張を促すものではなしに、官能の世界へのためたいにおいて、やむをえず差伸ばされる緊張となるのを見るのである。源氏物語におけるこの世の位置がこのようなものであり、半ば後ろむき、半ば前向きに切断され、このジレンマに立たされるのが、そこに生きる人間の姿であるとみるならば、そこに必然的に構築される倫理の世界の特殊性が把握出来ると思う。

前世と後世との間に挟まれて、それぞれの世界との関りに両分されるこの世は、それ自身としての前向きの充実した生のあり方を持つものではなかった。そうして、どちらかと云えばより大切な来世へかけての転機となる出家の時期は、各々自らの前世への関り方において異なる生の状態に応じて定められなければならない。そして、その定め方のむづかしさに、すでに見てきたような出家の時期への関心と、身構えと、そしてまた決行に当つての躊躇とが見られるのであった。

しかし、人と生まれて、仏の教を受け、真実に生きようとすればするほど、人間存在の無常を、痛切に体験しなければならなかった源氏物語の人々は、物語において懇ろな扱いを受ければ受けるもの程、真摯な態度で出家を望み、よし出家した姿を物語に示さないまでも、その身構えを示して、物語から姿を消して行っているのである。

物語には出家を決行した人々も幾人があった。最も懇ろな扱いを受けた主要人物としての藤壺宮を筆頭に、女三

宮、朧月夜内侍、權齋院、空蟬、宇治十帖においては浮舟、などを数えることが出来る。これらの人々が、何故に、どのようなにして出家したのであるかを辿ってみると、わずかに權齋院を例外とするのみで、すべて密通の回想をもつ人人であった。そうして、そこには、今日只今出家によって断ち切らねばならぬと考えられる罪の意識が存在するのを見るのである。もちろんそれは今日云う自由意志によって犯された罪というようなものではない。宿世によってもたらされた罪である。宿世によってもたらされる罪ゆえに、これを出家によって断ち切らなければならぬと自覚されるのである。次に源氏物語における罪の用例を探って、宿世のもたらす罪の意識にふれてみよう。

源氏物語における罪の語の用例は夥しい数を数えうるが、それには幾通りかの段階があり、語感の上からいって、深刻な文字通りの意味を含まないものから、倫理的な意識の濃厚なもの、そしてまた法律的な意味のものもある。

例えば、

1、御志一つの浅からぬによるづの罪ゆるさるなめりかし。

(夕顔)

心より外なる怠りなど罪ゆるされぬべく聞え給ひて、

(葵)

前者は夕顔に惹かれる余り、五条辺りの陋屋もいとわず、ひたすらに夕顔を慕って訪れる源氏君の気持を叙したものの、後者は、訪問の途切れを、何やかやと六条御息所に云いわけする源氏君について叙されたもの。以上は最も意味の浅い、殆ど無意識的な用例とみてよいであろう。

2、いで、あな幼な。いふかひなうものし給ふかな。……雀慕ひ給ふ程よ。罪得ることぞと常に聞ゆるを心憂く

(若紫)

低次な型通りのものであるけれども、仏教倫理の誠を踏まえた、罪の語のもつ本質的な意味にふれた用語である。

3、さしてかく官爵を取られず、浅はかなる事にかかづらひてだに、公のかしこまりなる人の、現うつしざまにて世の中にあり経るは、咎重きわざに他の国ひとにもし侍るなるを、遠く放ち遣すべき定めなども侍るなるは、さま異なる罪に当るべきにこそ侍るなれ。濁りなき心に任せてつれなく過し侍らむいと憚り多く、これよりおほきなる恥に臨まぬ先に世をのがれなむと思ふ給へ立ちぬる。

(須磨)

然^{しか}いちじるき罪にはあたらずとも、この院に目をそばめられ奉らむことは、いと恐しくはづかしく覺ゆ。

(若菜下)

前者は須磨退居を決意した源氏君が左大臣邸に赴いて述べた別れの挨拶に、後者は女三宮を慕う余り、六条院に忍び入って、ゆくりなくも逢う瀬を得た柏木の心事を叙したものである。いう所の「罪」は、何れも法律的な意味で罪科ととられるであろう。

4、わが罪の程おそろしう、あぢきなきことに心をしめて、生ける限りこれを思ひなやむべきなめり、まして後の世のいみじかるべきを思し続けて、

(若紫)

北山詣での源氏君、僧都に「世の常なき御物語、後の世の事など」諭されて、心ひそかに慕う藤壺宮との関係を自覺的に反省しているところを叙されている。これは、この場合、さっと心をかすめた罪の意識であり、このように考えられたからといって、直ちに悔恨をもって方向転換がなされたわけではないけれども、その語の用例として、本質的なものにふれたものであると思う。このようにして拾い上げてゆくならば、微妙な相違を段階として、多くの用例が考えられるのであるが、中でも、源氏物語における罪の意識として最も深刻な意味をもつものは、宿世のもたらす罪であり、それ政に出家をもつて対処されているのであった。

源氏君と藤壺宮との間柄のことは、それが始めから確然とした叙述はなく、縹緲とした始まりをもつゆえに、「輝くひの宮の巻」を想定されたりするのであるが、私は、現在のままで充分読みとることが出来ると考えている。むしろ源氏君、宮それぞれの側で深い反省と怖れと、しかも相惹かれる心の如何ともなしがたい悩みにおいて点出される表現の方が、はるかに、この二人の縁を効果的に現わしているのであって、空蟬や、夕顔や、その他の人々との関係とは異ってあるべきだと思っている。その意味では、六条御息所と源氏君との間柄も、現在物語に現わされているそれだけで充分ではないかと思われるのである。これら高貴な、そして年上の女性との邂逅は、そもその始めから、そんなに克明に描かれるべきものではないであろう。むしろ、こうして、何時始まったか分らないような逢瀬に、両者の恋の趣を汲み取るべきではないかとさえ思うものである。

源氏君と藤壺宮との場合、それぞれの側から、深い怖れに戦きながら益々深みに陥入ってゆくのを、如何ともすることが出来ないようである。けれども、その間に若君が生れ、桐壺第十の皇子として立太子の事があり、桐壺帝崩御の後となつては、唯一の後見として立つ源氏君が今なお宮に思慕の情を寄せるのを、宮は、その時こそ決然たる態度をもって出家に踏切らねばならないと自覚するのであった。

見だに向き給へかし、と心やましうつらくて、引き寄せ給へるに、御衣をすべし置きて、いざり退き給ふに、心にもあらず、御髪を取り添へられたりければ、いと心憂く宿世の程思し知られて、いみじと思したり。(賢木)

逃れ逃れて、逃れ得ぬ宿世をしみじみと感じつつ、それゆえの決断であつたのである。翻つて、宮の側からこの間柄をどのように受けとめているか点検してみると、それは一貫して「あさましき宿世」として認識されている。そうして、その宿世からの断絶が決意されたのが、桐壺帝の御国忌直後の出家であつた。宮の出家には、反対派弘徽殿一派からの迫害に、よりよき口実を与えるこうした事柄の漏洩を、未然に防がれる意味も含まれてもいたであらう。しかし、道ならぬ源氏君との間柄そのものへの訣別が、より重要な要素であつたに違いない。宮の側から「あさましき宿世」と考えられたこの間柄は、源氏君の側からも罪として意識されていた。須磨に退く暇乞いに宮を訪れた源氏君は左のように述べているのである。

かく思いがけぬ罪にあたり侍るも、思う給へあはする事の一ふしになむそらも恐ろしう侍る。

(須磨)

ここにいわれている「罪」は法律的な意味合で述べられているのであらうけれども「そらも恐ろしう」として自覚されている。それはその奥にひそむ罪に戦っている姿が見られるのである。

源氏君と宮との間に犯された罪の意識が歴然と浮び上ってくるのは、宮の没後、源氏君の夢に現れた権卷の卷末の叙述である。

行をし給ひ、よろづに罪軽げなりし御有様ながら、この一事にてぞ、この世の濁りをすすい給はざらむと、物の心を深く思したるに、いみじく悲しければ、何わざをしてし人なき世界におはすらむを、とふらひ聞えにまうでて、罪にもかはり聞えばやなどつくづくと思す。

この一事が、帝（源氏君との間に生まれた御子）への安否を氣遣われる執着と取るならば別であるが、源氏君との間の秘密とするならばこの場合の罪は、二人の間に犯された罪ということになる。しかも、出家も行も効を奏さないことになっている。出家は、その上に重ねられる罪を拒否する決断にすぎないのであって、すでに犯された罪は償うことが出来ないであろうか。

物語においては、然るべく用意された死を迎えたにも拘らず、成仏しえない苦患の姿を示すものは、この宮の他に、六条御息所があり（明らかに源氏君に対する執着）宇治八宮（御子、姫君達に対する執着か？）がある。このような過剰な執着も、御息所の場合には明らかに宿世として自覚されているものであった。

罪の最大、最深のものが、宿世による罪として認識されているのを見てきた。それは宿世によって犯されるものであることにおいて、今日考えられるような、個人的な、自由意志において犯された罪とは異なる。それは前世からの約束として、犯さるべく定められているのであるが、それと知った時、敢えてそこから逃れる道、それこそ決断を伴った道として、出家が考えられるのである。宿世は開展を見なければ分らないけれど、開展によって、垣間見られた宿世の、それに如何に対処するかは個人の意志、決断に関ってくるものである。そこに本人の責任が考えられるであろう。上述の藤壺宮、六条御息所、宇治八宮などは、出家しても（八宮は出家しなかったが、殆んどそれに等しい修行を積まれた）なお断ち切れなかった愛執の故に、永く苦患に悩む姿を止めているのではなからうか。私は前に出家は宿世のもたらす罪を断ち切ることであったといった。けれども、出家がただちに、すべてを救の方向に解決するものではないようである。出家の後に然るべき勤行がなされ、極楽に引接せられてなお、成仏への精進がそこでも行われなければならない。まず、極楽に導かれて、この世より一層清浄な、さまたげのない世界での精進が期待されるのである。

私は宿世の罪という語を用いた。それは、現代的な意味でいうような、個人の責任において律せられる罪ではないけれども、それが罪として意識せられるのは、律令に定められた罪への遙かなるパースペクティブをもつその意味で道徳的規制を感じるのである。それゆえ、それを犯すことは罪であるけれども、それよりも、そうした罪を犯さ

なければならぬように約束づけられた宿世が問題なのである。それで、その宿世を断ち切ることにより、再び犯さない道を選んだ決断が、倫理的に評価されるわけである。

この宿世の力を絶対のものと視、すべてが宿世によって予定され、それ以上の道が、決断によっても選べないとするのが、宿作外道である。教えられるところによれば法華八講二百題の問答の一に

問、決定業は回^{かいてん}転するや否や。

答、観音称念の人は決定業も回転するものなり。

というのがあろうである。観音称念の人は宿世も回避しうるのである。出家によって、専心観音を祈る者は当然のこと、俗世にあっても観音を祈る者はそこから離脱出来るといのである。長谷、石山の観音信仰は、こういう処から浸潤していったのであろう。

浮舟についた執念き物怪が、横川僧都の加持によって追われてゆく時、「観音とさまかうざまにはぐくみ給ひければ、この僧都に負けたてまつりぬ、今はまかりなむ」(手習)という所がある。これはそのよい例であろう。

しかし、出家は、とにかくにも宿世の運び込んでくる罪を逃れる最も倫理的な決断としての対処の仕方である。その意味で、密通の回想をもつ女性達は、すべて出家させられているのではないであろうか。それは過去の罪を清算するためであろうが、同じ罪をふたたび重ねないようにする為でもあった。藤壺宮の出家が、迫りくる源氏を避けるものであった事は前に述べたが、浮舟の出家も、第三の男性たる中將の訪れが、浮舟を一刻もゆうよならぬ思いに駆り立てている。また空蟬も夫亡き後継子の紀井守を逃れるのがその目的であったようであるし、朧月夜でさえも朱雀院の出家後を訪れる源氏君からの逃避の意味がなかったとは云えないのである。もっとも、女三宮は少しく趣きを異にするようである。過去の罪の清算はもとより考えられるであろうが、あえかな宮の、心労を加えた産後の衰弱が死を予感させたものとして、女三宮の言葉通り受取っておいてもよいであろう。

なほ、え生きたるまじき心地なむし侍るを、かかる人は罪も重かなり。尼になりて、若しそれにや生きたまるところみ、また亡くなるとも、罪を失うこともやとなむ思ひ侍る。

(柏木)

生くべうも覚え侍らぬを、かくおはしましたるついでに、尼になさせ給ひてよ。

(柏木)

前者は夫たる源氏君に、後者は父朱雀院への訴えとして述べられた願いである。前者に二度みられる罪の語は、出産で死ぬ人の罪は重いとされているその罪の意である。しかし、この場合も、柏木を逃れる必要はなくなっていたが、源氏君を夫として暮す煩いからの逃避の心が働いていなかったとは云えないと思うのである。

こうした歴然たる宿世の罪を意識しないまでも、一方では、人間と生れたそのことが、その宿世の断絶を希求すべく、永遠に向って準備がなされなければならない。宿世を見はてた者の落着きと、決断とをもって、然るべき出家を希望し、決行することは当然であった。紫上の切なる出家の希望、権斎院の出家はその例であろう。特に死を目前に自覚した紫上、斎院として仏事に遠ざかっていた権君においておやである。物語では端役の存在であるが、末摘花の出家もこの系列の末端に数えてよいであろう。

結 語

繰返して述べて来たように、源氏物語においては、この世は、前世と後世との関連において見られ、この世に生れた者は、そこに開展せられた姿によって、前世から関つてある自己の生を、良しとも悪しとも判断して享受し、その見限りのついた時、それは可及的に早い方が望ましいのであるが、しかし未練を残したりしない限りにおいて、永遠の生の門としての、来世への準備としての出家をなすべきである。とされているようである。

前世からの関りにおいて、最も恵まれた姿を示していると考えられる源氏君を評して、北山の僧都は次のように云っている。

あはれ何の契にて、かかる御様ながらいとむつかしき日本の末の世に、生れ給ひつらむ

(若紫)

「日本の末の世」と限界を出しているけれども、それにふさわぬほどのすばらしさの方を強調しているのである。源

氏君自身もまた、前にも引用したように、

いにしへより御身の有様思し続けるに、鏡に見ゆる影をはじめて、人には異なりける身ながら、
(御法)

この世につけては、飽かず思ふべきことをさあるまじう高き身には生れながら、
(幻)

と自覚し、容姿、身分、すべて欠くる所ない前世からの約束を、それとして受けとっているのである。荒れはてた宇治の廃院の庭に倒れていた姫君の稀にみる美しさを、横川の僧都のような人でさえも

げにいつときやうざくなる人の御ようめいかな。功德の報いにこそ、かかる容貌かたちにも生れ出でけめ。(手習)

と考えているのである。かく容姿から、身分、才能、人生万般の事象が、宿世として定められ、約束づけられているとするならば、時に「宿世などいふらむものは目に見えぬわざにて」(若菜下)と反撥してみても、この世に見える世界として定められたその形が宿世であって、

すべてあしくもよくも、さるべき人の心にゆるし置きたるままにて世の中を過すは宿世宿世にて、(若菜上)と、宿作外道と墮さないまでも、その生は前世に関する限りにおいて後ろ向きとならざるをえない。源氏物語の世界がこの世に生きる生き生きとした倫理をもちえないのは、そういう現世観に関ってくるのである。

物語の主要人物とされる。源氏君、紫上、藤壺宮などに、穏やかな、他の存在に対しても、氣遣う、ものやわらかな、中庸を得た人為を用意され、そうした人物がকাশし出す世界が、もののあはれの倫理ともいうべき、同情同感に富んだあはれの世界を構成しているが、それが意志的にどれ程の根底をもっているかという段になると、それは宣長のいう人間の自然の情として存在するものというようなことでしか云えないのである。現世的な日本人の自然に培われた倫理意識、神道的な清さにさをさすもの、あるいは儒教の輸入によってとり入れられた仁、調和の理念が加味されたもの、そうして、さきに「源氏物語の仏教的要素——横川僧都について——」(日本文学、第十七号)でもふれたように、すべての生あるものを大切に見守ろうとする仏教の生の畏敬(慈悲の心)などが、混成してつくりあげた、穏やかな和やかな思いやりの精神をよしとする価値観が示されているけれど、極めて消極的である。そうした穏やかな性格が、果報としとして生まれついた人々も、それを享受して生きても束の間すぎない。

そうしてまた、これもすでに見て来たように、この世を後世への願に切り替えるその切れ目は、果報あるもの、ないもの人さまざまであって、そのかねあいが後ろ向きである。ただ、その決断において切り替える、踏み切りの時が、積極的、前向きであるに過ぎない。しかも、それが見えない後世に関つてあるだけに、思いをそこに致すことの出来ない者にとっては、あるいは単に否定的であつたり、躊躇、逡巡せざるを得なかつたり、また、とにかくに目前の官能の世界からの断絶として、恩愛の断ち難いものがあり、涙多いものとなっているのである。

このように見てくると、源氏物語の現世観は、仏教のいう三世因果のそれを枠としているものであり、重きをかける来世に阿弥陀浄土を願うものとして、また、この世においては観音の利生を信じ願うものとして、法華経を一乗としつつ、浄土の世界に傾いていった。当時の台門の教理を、背景とする思考に基づいているようである。しかし、それは、教理むき出しの世界ではなく、縹緲と見られるだけの話で、強いて言えば仏教一般の指し示す世界を、臚げに反映しているにすぎない。現世の具象的映像としての物語の世界として、歪みは多いのである。しかし、ともあれ、そうした意味でも仏教的世界観を幽かにでも透視出来たことにおいて、私はこの考察を一応打ち切りたいと思う。このような現世観が、作者の人生観と直ちに結び付けられるものかどうか、それは、物語制作の約束にもふれて問題は残るであろう。いずれ稿を改めて考えてみたいと思っている。

(昭和三九年八月)

The Buddhistic Factors in *Genji Monogatari*

— The View of this World —

Kiyoko Maruyama

I have examined the view of this world or of *gense* in terms of Buddhism as revealed in *Genji Monogatari* through a detailed analysis of the work.

In *Genji Monogatari*, this life is considered in connection with the previous life (*zense*) and the future life (*raise*). Those who are born to this world think of their destinies, whether they be good or bad, as being in consequence of their lives in the previous world. The idea is that as soon as they realize the limitations of their own life, they should enter the priesthood in preparation for the future life but that they should first make certain that they have no lingering desires for this world.

The main characters of the tale, for example, Genji, Fujitsubo, and Murasaki, while trying to lead a good life, become aware that this world is full of imperfections and begin to think of an appropriate time for entering the priesthood. The manner in which the characters meditate upon their destinies and their sins on the basis of the Buddhistic doctrine of the continuum of life from the previous world through the present world and the future world constitutes the most important substance of the tale and is the main factor which raises the work to the level of literature.

However, the continual looking backward of the characters to the previous life in making their decisions seems to me to be the cause of the lack of a positive attitude towards life in the tale. This attitude is a reflection of the Buddhistic view of life as intimated above and whether or not the author herself held this view is open to question. This problem will be the subject of my next paper.